

『緇門警訓』の文献史的考察

椎 名 宏 雄

一

大正蔵卷四八に収録される『緇門警訓』一〇卷は、明代の如曇によって編集された禅籍として知られる。「緇門」とは仏門の意味であるが、本書の内容が主として参禅弁道に益する先哲たちの垂誡・遺訓など一九六篇の集成であるため、特に修行を重んじる禅門で愛好され、長らく親しまれてきた歴史がある。

ところで、正蔵本のテキストは明治の縮蔵所収本を底本とするのであるが、これらは明代の大蔵経収録本以来の一〇卷本の系統を継承するものである。このいわば通行本の系統に対して、韓半島や日本の近世までは、長らく上下二卷本が民間で行われていたのであり、これがむしろ古版からの正系であった。また一方、『緇門警訓』一九六篇中の二一篇だけが別行されて、『緇林宝訓』一卷として古くから行われていたのである。いったい、これらの関係はどうなっているのか。

ろうか。

従来、本書をめぐるこうした文献史的關係について照射した唯一の成果が、黒田亮氏の「緇門警訓と緇林宝訓との關係」(『朝鮮旧書考』所収)である。氏は、元代の永中が古刊の『緇林宝訓』を大中に増広して『緇門警訓』としたことの指摘や、自蔵本など九種のテキスト類の書誌事項を掲げ、本書の文献研究に先鞭をつけられている。

だがしかし、本書の祖本ともいふべき『緇林宝訓』の撰者や成立、永中増広本と現行如曇本との關係、二卷と一〇卷の關係など、本書の文献史的な基礎事項への関説はみられず、また所説には誤りもあるなど、けっして十全なものではない。したがって、黒田説を承ける各種の解題(『仏書解説大辞典』『大蔵経全解説大事典』『禅籍解題』など)はおしなべて不備、かつ誤解が少なくない。いうまでもなく、古版類の検討が希薄または不毛という、古い中国禅籍に共通する文献史的問題に基因するからである。

とはいうものの、じつは筆者も右の両書がこれまで刊行された三〇版以上のテキストすべてなど、とうてい見ているわけではない。特に『緇門警訓』は李朝期の半島では大いに流行し、一〇回をこえる刊行が知られるが、そのほとんどは未見である。ただ文献研究というものは、必ずしもすべてのテキストを閲覧する必要もないし、半島の寺刹版はほとんどが底本に忠実な改版であることを考慮すれば、半島刊行の頻度に幻惑されてはならない。それらの中の主要テキストを精査することによって、他の半島版のほとんどが類推できると考えられるからである。

こうした観点から、筆者は当該両書の主要とみられるテキストは一応すべて調査している。そこで、前述の問題点を含めて、以下、本書の総合的な文献史的検討をまとめてみたい。次頁以下に両書の諸版を表示する。ただし、近年における多くの覆刻本については、特に重要な中華大藏経(台湾と北京との二種)本、および永楽北藏本、の計三種だけにとどめた。

二

まず、『緇林宝訓』であるが、宋版を入れると史上少なくとも五版が存在した。そのうち現存最古の版が、鎌倉末期の覆宋五山版とされる②である。しかし、現存する三本にはいずれも刊記・序跋ともになく、刊時や本書の文献史を知るべ

き直接の資料にはならない。ところが、③の覆五山版とされる成實堂文庫本は、②とは版式を異にする異版であるが、このテキストには刊記こそないものの、巻末に扞賢なる人による貴重な刻記が保存されている。次にその全文を載せよう。(原漢文、以下同)

先哲の言を立つるは、皆な後世の法の為たる所以なり。今、其の訓戒を専らにせる者を萃めて別に一編と為し、以て敏学好修の士に貽さん。庶幾わくは、朝夕に観覽し勉勵み力めて行じ、以て聖賢の域に入り、古人の意に負くこと毋れ。

宝祐乙卯(三年・一二五五) 良月初吉

武林竹巖の扞賢、敬って題す。

これは刊行跋とみてよいから、本書は南宋末の宝祐三年(一二五五)に扞賢によって編刊されたのである。武林は浙江省杭州であろうが、扞賢については、『続伝燈録』巻五に育王常坦の法嗣に湖山扞賢がみいだされるが、この人は北宋期の人であるから別人であり、目下のところ未詳である。収録される二一篇の内容は、禪者によるものが一〇篇、大智律師元照の小品が四篇、天台の慈雲遵式のもの二篇、その他である。時代的には、梁、唐の撰者が五名、その他は五代、北宋の人々であり、要するに扞賢は前代までの仏者による作品を選んだのである。

行脚僧たちにとって、こうした身近な短言寸句の集書は魅力的であり、よろこばれたはず。右の覆五山版の底本は、こ

『緇林宝訓』

No.	仮称	刊行時	西曆	卷冊	刊行者等	底本	所蔵
①	初版本	宝祐三	一二五五	一卷	武林、竹巖の扱賢編	①	東洋、成篁、天理
②	五山版	(鎌倉末)		一卷一冊	(未詳)	①	成篁
③	覆五山版	(室町初)		一卷一冊	(未詳)	①	駒大、松ヶ岡、椎名
④	寛永本	寛永一六	一六三九	一卷一冊	京都、田原仁左衛門	②	
⑤	後刷本	(江戸期)		一卷一冊	京都、風月堂	④	黒田 ^田

『緇門警訓』

No.	仮称	刊行時	西曆	卷冊	刊行者等	底本	所蔵
①	初版本	皇慶二	一三三三	二卷	幻住庵永中(増補)	①	北京函(下)
②	至正本	至正二三	一三六三	二卷二冊	慧欽・義深募刻	①	北京函(上)
③	高麗版	洪武一一	一三七八	二卷	京畿道広州小雪山	①	鄭眺震
④	成化本	成化一〇	一四七四	二卷二冊	如晉追補、覚澹重刊	②	金敏榮、韓内閣
⑤	表訓寺版A	嘉靖一一	一五三二	二卷二冊	江原道金剛山表訓寺	⑤	黒田 ^田 (上)
⑥	石崙庵版	嘉靖一六	一五三七	二卷二冊	慶昌道小白山石崙庵		東洋、黒田 ^田 (下)
⑦	表訓寺版B	嘉靖一八	一五三九	二卷二冊	江原道金剛山表訓寺		伊豆修禪寺
⑧	法泉寺版	万曆一	一五七三	二卷二冊	全羅道僧達山法泉寺		〔陟〕一〇(北蔵の統蔵)
⑨	万曆本	万曆九	一五八一	一〇卷一〇帖	(未詳)	④	東国大(零一冊)
⑩	北蔵本	万曆一四	一五八六	二卷二冊	北京、明朝	④	大塚、韓国中央函、黒田 ^田 (上)
⑪	雲門寺版	万曆一六	一五八八	二卷二冊	慶昌道虎踞山雲門寺		駒大、黒田 ^田 、椎名
⑫	嘉興蔵本	崇禎七	一六三四	一〇卷二冊	嘉興、楞嚴寺	⑩	明蔵二〇四―四―五
⑬	靈井寺版	崇禎一一	一六三八	二卷二冊	慶昌道戴岳山靈井寺		장서각
⑭	普賢寺版A	崇禎一一	一六三八	二卷二冊	平安道妙香山普賢寺		東国大(零一冊)
⑮	興国寺版	康熙三	一六六四	二卷二冊	順天府興国寺		大塚、韓国中央函、黒田 ^田 (上)
⑯	寛文本	寛文六頃	一六六六頃	二卷二冊	(未詳の町版)	④	駒大、黒田 ^田 、椎名
⑰	普賢寺版B	康熙二一	一六八二	二卷二冊	平安道妙香山普賢寺	④	간송문고 만송문고
⑱	性聰註本	康熙三四	一六九五	三卷三冊	晋州智異山双溪寺	④	東国大(↓韓国仏教全書八)
⑲	黄檗蔵本	宝永六頃	一七〇九頃	二卷四冊	京都、一切経印房	⑥	〔陟〕一〇、多数
⑳	竜蔵本	雍正一三〜乾隆三	一七三五〜八	一〇卷一〇帖	北京、蔵経館	⑫	〔我〕一〇

『緇門警訓』の文献史的考察(椎名)

②①	縮蔵本	明治一七	一八八四	一〇卷一冊	東京、弘教書院	⑫	「騰」一一
②②	光緒本	光緒一八	一八九二	一〇卷二冊	揚州、江北刻經処	⑫	椎名
②③	正蔵本	昭和三	一九二八	一〇卷合冊	東京、大蔵経刊行会	⑫	(卷四八)多数
②④	中華蔵本	民国五七	一九六八	一〇卷合冊	台北、修訂中華大蔵経会	⑫	(二一三四、影印)多数
②⑤	中華蔵本	—	一九九四	一〇卷合冊	北京、中華書局	⑫	(七九、影印)多数
②⑥	永楽北蔵本	—	二〇〇一	一〇卷合冊	北京、線装書局	⑩	(一九四、影印)多数

とによると①とは別版の宋版であった可能性が高い。わが江戸期の刊本二種の存在は、すでに元代と明代に本書が増広された『緇門警訓』が、まだ本邦では入手不能であった時代に、

これまた叢林の渴を癒したことを物語るものであろう。次に永中が増広した『緇門警訓』。永中の仕事は、韓半島で行われた二巻本の系統によつてのみ知られる。わが東洋文庫には⑧の法泉寺版が所蔵され、上下二巻二冊本の構成は、

(一)序、洪武一年、太古普愚撰、(二)卷上目録、(三)卷上本文、(四)卷下目録、(五)卷下本文、(六)刊語、絶際永中撰、(七)刊記、万暦元年、(八)施賤者銘、(九)統集本文、(〇)跋、嘉靖四年、智異山老松庵撰、となっている。

これらの諸記事とその構成によつて、永中による増広の時期とその内容、さらにその後における如香による統集の内容、およびこうした体裁を完備しての半島初刊の事情、といった本書の文献史に関する基本的で重要な事項が判明するのである。そこでまず、冒頭で述べた通行一〇巻本ではみられない記事のうち、最も重要な(六)永中の刊語と(一)太古の半島初刻序

を、以下に続けて掲載しよう。

道に本と言なく、言に因りて道を顕す。比の三教の書は、由る所の作なり。『緇林宝訓』は旧版存せず。皇慶癸丑(二年・一三二三)、余が募縁に因りて、重ねて鋳梓を為す。乃ち遺編断簡中、君臣や道俗の凡そ以て激励訓誡とすべき者を綴りて頗る増入し、之を目して『緇門警訓』と曰う。庶わくは、学者の見聞を広め、意を得て言を忘るるの時に至らんことを。則ち区々の志は、豈に徒然なる哉。

呉城の西、幻住庵の比丘永中、謹んで識す。

尺大地の人、誰か仏性なく、誰か信心なからん。……(中略)……太古、南游して求法の時、幸いに斯の『警訓』に遇い、本土に將ち帰る。意は広宣流布し、国を利し人を利せんと欲ること年有なり。今、勝士の明会と道庵あり。大誓願を發し、広く檀縁を化し、鏤板して印施す。国人をして一見一聞し、皆な勝縁を結び、畢竟は同じく正覚を成せしめん。此れは斯の『警訓』の大義か。

戊午(一三七八)正月初吉

三韓の国尊、小雪山の利雄尊者、謹んで序す。

右文中、まず永中の刊語に注目しよう。かれは『緇林宝訓』

の禅門における価値に着眼したとみられる。しかし、該書の板木はすでに失われていたので、改版するに当って、同内容の小作品を内外から蒐集し、それらと『緇門宝訓』とを合わせて編集し、新たに『緇門警訓』二巻として皇慶二年(一三三三)に刊行したのである。全体の数量には言及していないが、さきの⑧法泉寺版を精査すると、巻上に一〇〇篇、巻下に八六篇が収められているが、それらの中には『緇門宝訓』の各篇が、上巻中に一九篇、下巻中に二篇、がそれぞれ配せられている。つまり、永中による増補は一五一篇の多きにわたり、

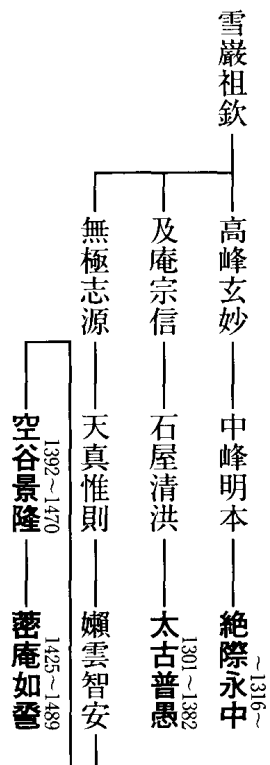
新編『緇門警訓』は一七二篇の小品集成となったのである。

永中なる人は、僧伝類にも載せられず、生没年も未詳であるが、永らく西天目山幻住庵に住して玄風を振った中峰明本(一二六三〜一三三三)の法嗣、絶、永中、その人である。かれもまた幻住庵に永らくとどまり、一三世紀末から一四世紀初めにかけて、『禅門宝訓』をはじめとして『高峰和尚禅要』『鐔津文集』『護法論』などの禅籍を次々に刊行した学僧であった。これらの禅籍は、のちにいずれも半島で流行することは注目してよいが、いまは所説の範囲をこえる。

ただし、『緇門警訓』二巻の高麗初刊は特記しなければならぬ。高麗末期の高僧、太古普愚(一三〇一〜一三八二)が入元して湖州(浙江省)霞霧山の石屋清洪に参じ、法嗣となつて帰国したのは一三四八年である。その時に『緇門警訓』を

将来したもの、念願叶つて刊行したのは、その三〇年後であった。この高麗初刊本に寄せた序文が前掲のものである。「利雄」は太古に贈られた尊者号。なお、右の序文は『太古語録』のものとは若干の異同がある。とまれ、この太古序は半島版の本書ではすべて巻頭を飾っていることであろう。興味深いことに、太古と永中とは法系上で近い関係にある。のみならず、次に紹介する続集者如曇もまた同じ派祖、雪巖祖欽の法系に連なる人である。そこで彼等の法系を次に示しておこう。

三



高麗初刊本は、永中増広の元版二巻本を底本としたものであろう。あるいは至正本(一三六三)が底本であったかもしれない。いずれにせよ、まだ明代の如曇続集部分は含まれるはずはない。ところが、前掲の法泉寺版(一五七三)には、この続集二四篇を含む。であるからには、半島版はさきの一覽表に記載した⑤〜⑧までの版のどこかで、続集部分が加え

『緇門警訓』の文献史的考察(椎名)

られたものと推測されよう。

ところで、その如香による続集は、どのような経緯であったのか。これは、一〇巻本のテキスト巻頭に置かれる空谷景隆による序文でも概要はわかるが、如香じしんの跋語が最も具体的である。ところが、この跋語がみられるテキストは、目下のところ⑯寛文本だけである。寛文本も伝本は稀となっているようであるが、一応、完本とみられる筆者の所蔵本二冊によって、まず構成内容を示そう。

- (一)成化六年、景隆重刊序、(二)卷上目録、(三)卷上本文(八六篇)、(四)卷下目録、(五)卷下本文(八六篇)、(六)続集卷上本文(二三篇)、(七)続集卷下本文(一一篇)、(八)助縁者・刻工銘、(九)緇門直音、(一〇)成化一〇年、覚濬重刊後序、(一一)成化一〇年、如香跋語

右の通りであり、しかも版心の刻記と丁数を精査すると、本テキストは成化一〇年当時のテキストを忠実に改刻した貴重な版本であると考えられるのである。惜しむらくは刊記がみられないが、『江戸時代書林出版目録集成』所収の各目録によれば、寛文六年(一六六六)頃とされる出版書目に『緇門警訓』二冊が初めて登場する。本書の別版はほかに知られないから、筆者の所蔵本は寛文六年頃に刊行されたものとみられる。現物はたしかに古いが、摺刷は良好のテキストである。

ついでながら、この寛文本と関連する⑰の黄檗蔵本にふれておこう。外面的なことがらを先にいえば、黄檗蔵本は寛文

本とまったく同一版でありながら、表紙や題簽は檗蔵特有の体載をとり、「陟」の函号が付された四冊本となっているのである。しかも、内容的にも右に掲げた(九)の緇門直音と(二)の如香識語の二つが省かれている。だいたい、黄檗版大蔵というものは、近年の諸先学による調査や研究によれば、底本とした嘉興蔵(隠元が寄贈を受けたもの)に欠本が若干あったようである。その部分の補充には、本邦既刊の町版がある場合はその板木を譲り受けて摺刷し、その際に刊記部分を削除し、外面的な体載は黄檗蔵本として統一を図った、といわれる。

つまり、『緇門警訓』の黄檗蔵本は、黄檗蔵経のいわゆる「入れ版」の典型なのであるが、それはともかく、(九)と(二)の二つが削除されたのは遺憾であった。駒大には寛文本(巻尾欠丁あり)と黄檗蔵本の二本が所蔵され、筆者蔵本と黒田氏旧蔵本などの寛文本との比較によって、こうした事実が判明したのである。

筆者蔵本には(九)と(二)が完備している。(九)の「緇門直音」は『緇門警訓』二巻の音釈で、全六丁から成る。末尾には「上巻拾遺」と「下巻拾遺」の項目分けがあることにより、如香の続集部分までを含むこと、つまりこの「緇門直音」は如香が続集をなした当時のものと認められる。のみならず、この寛文本は右に示したように如香が続集を加えて新たに本書を刊行した際の構成内容を、すべて忠実に保存しているとみら

れる。

その刊行は成化一〇年であるが、現物の明版は北京の国家図書館に上巻だけが所蔵される。このテキストは容易にはみられないが、寛文本によって知られるのはありがたい。巻首に置かれる空谷景隆（如曇の本師）の重刊序は、そののち本書の一〇巻本系統では、かならず巻頭に置かれることとなる。ただし、景隆序は成化六年に書かれ、如曇の刊行に言及しているにもかかわらず、寛文本の巻末に並んで置かれる(○)覚濬後序と(二)如曇識語は、ともに成化一〇年の年記をもつ。これはなぜであろうか。それは、如曇の跋語をみることによって氷解する。そこで、次にその全文を示そう。

予、景泰の間（一四五〇）一四五六）より空谷老師に参学す。帰するは、只だ掩閣して内典を披閱するのみ。偶たま『緇門警訓』一帙を獲て之を読むに、人をして悚然として興起たしむるは、皆な先哲の格言にして、深く吾徒の後進者を裨益するあり。惜しむらくは、閩中より来る板は字画細小にして、老眼の燈窓には堪えず。爰に浼士友の沈君節が繕写し、加ます綉梓を大にし、以て其の伝を広む。

伏して願わくは、功助ある所は上は四恩に報じ、下は三有に資せんことを。次に冀わくは、先師衡宗和尚を莊嚴し、徒孫徳順・先考姜公・妣嵬氏、及び法界の衆生と、同じく菩提を証せんことを。乃至、見在の自身、洎び徒弟の道俊等、諸の見聞随喜の者、入世出世して常に比丘と為り、直に至りて同じく龍華に入り、仏

『緇門警訓』の文献史的考察（椎 名）

の授記せる者に遇わんことを。

成化十年歲甲午（一四七五） 仏成道の日

嘉禾真如講寺の比丘、如曇が識す。

右によれば、如曇は自ら統集二四篇を付した新編の『緇門警訓』を刊行するため、木版では伝統のある閩（福建省）に板木の製作を依頼したようである。ところが、送られてきた製版の文字が小さすぎたので、改めて友人の沈君節に原文を浄書してもらい、再度板木を作り直した。当然ながら、新たに助縁者も募らねばならなかった。寛永本の(八)には、この際の助縁者として僧俗一四名の名が刻まれ、刻工「四明王鴻刊」の刻記すら遺存している。如曇の住地やこれらの刻記からすると、成化本は杭州あたりから刊行されたとみてよい。

如曇は跋語の肩書のとおり、嘉興（浙江省）真如寺の学僧であった。のち、遷化する年に完成させた『禪宗正脈』一〇巻に自ら寄せた跋語中、先師景隆は成化六年に遷化したと述べている。すると、景隆は『緇門警訓』に寄せた序が絶筆となったのであろう。先師の遷化後の諸事や、また右の改版の問題などで、成化本の完成は当初よりも四年の遅れをきたしたのである。如曇は先師の序で巻頭を飾り、供養の意を表したので。新しい後序を覚濬に書いてもらい、おのれの跋語とともに巻末に配した。古版にみられる多くの序跋には、みな深い意味がこめられていることを教える好例である。

如奘は『補続高僧伝』巻二五に所伝があり、禪宗の系譜では前掲のように雪巖祖欽下第六世の密庵如奘（一四二五～一四八九）とされる人。肩書に付せられる真如講寺は、『嘉興府志』巻一八の「寺觀」によれば唐代の創立であり、裴休の宅を寺にしてから錚々たる歴史を経て、洪武二四年（一三九二）には教寺（講寺）とされている。ここに臨濟宗の流れをくむ如奘が住したからには、相当の学僧でなくてはならない。これは、前記二書を刊行したほか、『万善同帰集』にも跋を撰して刊行している。このように、明代における禅籍の出版史上で如奘は大きな功労者であった。

さて、さきに表示のとおり、本書の一〇巻本は、知られる限りでは北蔵本が最古である。北蔵という大蔵経は、明初の永楽年間に北京で開雕された永楽北蔵が主体である。ところが、ここには『緇門警訓』は入蔵していない。初めて入蔵するのは、後の万曆一四年（一五八六）ごろであり、永楽北蔵に四一函四一〇帖が続入蔵した中に含まれた時であり、「陟」の函号をもつ。全体の構成は、(一)景隆序、(二)目録、(三)本文、という単純なものである。

ただ、一〇巻の内容を寛文本（つまり成化本）と対比してみると、寛文本の上下二巻をそれぞれ四巻ずつに開いて巻一～四、巻六～九とし、続集上の全一三篇中の九篇と、続集下の全一一篇中の一巻とを合わせて巻五に配し、残る一四篇を

巻一〇に配置し、全一〇巻としたことが知られる。蔵経の折本という体裁の分量に合わせた、事務的な措置だったのであろうか。

とまれ、この北蔵本は嘉興蔵本や竜蔵本の底本となり、さらに嘉興蔵本↓縮蔵本↓正蔵本と、大蔵経の權威を背負って完全に通行本の座を占めることとなる。

以上、文献史に終始し、一九六篇個々の資料価値に言及することができなかった。資料的に貴重なものがないことは、別の機会に公表したい。（注略）

〈キーワード〉『緇林宝訓』、『緇門警訓』、折賢、永中、如奘

（龍泉院住職）